

戦争とは、かくかくのものなのだ。殺し合いはやめよう、平和の貴いことを認識しよう。人々の英智によってこの平和を守り維持しなければならないと思う。

終戦後シンガポール

ケッペル収容所

茨城県 松塚才治

昭和二十年八月十五日、松井侍従武官の言葉（陛下の言葉）は司令官田中将閣下より全軍に伝えられた。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで祖国復興のためにつくしてくれ」。恐れ多くも陛下のお言葉であるとの玉音の伝達を聞いて、集合した万余の将兵は沈黙のうちにむせび泣く。自分達が生きているのに無条件降伏とは、後で知ったのでその時はまだ停戦協定とのみ思っていた。

空襲は止まったが急に今までと違った忙しさがやってきた。裸体で穴掘りをやっているわけにはゆかない。

部隊に戻ると早速大隊長より中隊長へ、各隊へと指示が忙しく下った。近日中に敵軍が接収してくるんだ。

昭南島の全軍がジョロンに集結して、ここで決戦を行うべく各部隊は丸木の掘立小屋の宿舎と倉庫をつくり、糧秣、被服、武器、弾薬など二年分を集積、トーチカも縦横に通ずるように出来上がり、英軍二十五万を殲滅すべく準備完了という時である。兵は夜も昼もなく、休憩とてなく頑張った。これらの若い兵士の努力も消えるのだ。無条件降伏のつらさ。

英軍はジョロンを四日以内に引き払えとの命令。馬來半島のコタチンギへ移動しなければならない。鍛えぬいた若武者、日本兵の身も心も二十四時間連続の重労働に疲れきって夢中で命令のままに動いた。

移動にとり残されてはと誰もが私物を捌いて部隊と同行をはかる。誰かが残って敵軍にすべてを引き渡す役をせねばならぬ。当然、経理士官原田少尉の役である。日頃いばった勇氣はどこへ消えたか。逃げるのは一番早い。真っ先に私物を抱え車に乗ってしまった。

部隊の引き揚げたあととは急に淋しかった。自分は経

理責任者として原田少尉の代わりに残った。久保田軍曹と松塚伍長（自分）が下士官で責任者、そして平田上等兵、外谷一等兵、上原一等兵、上野一等兵、百々瀬上等兵の七名が残った。広い淋しい山中の仮兵舎にかたまつて倉庫は交替で監視して守った。各部隊はこうした少数の犠牲兵を残して英軍の命令のまま動かされた。

七名の留守兵のところから明日は使役を二名出すよう伝達があった。敵中へ二名でゆく。誰も好まない。だがやらざるを得ない。ジャンケンできめた。平田と百々瀬が行った。

現地人の日本兵崇拜も八月十五日まで、今日は倉庫に残した物資を盗みにくる。防ぎようもない。徒党を組んで来ては破つて持ち去られる。戦争中なら発砲も出来るが、七名では守りようもない。夜も寝ず交替で廻つたが何処かやられる。いつそ早く戦死していた方がよかつた。誰もがつぶやいた。使役に出た平田と百々瀬は翌日夕方になって戻ってきた。報告は「班長殿、二度と私を使役に出さないで下さい。ああ生きた

心地はなかつた」とガックリしていた。

話によればシンガポール市庁前広場にて芝運び。軽い芝ではあるが三百メートル位のところまでかけ足で運ぶ。帰りもかけ足。はじめはさほどでなかつたが、何回やって終わるやら分からない。ゆっくり走るとなぐられる。朝九時にはじまつて昼食もなく夕食もなく休む時間とて与えられず、全く飲まず食わず。看守は交替するがこちらは休めない。夜半も続く。一昼夜が過ぎ次の日も続いた。そして夕方になって戻つたとのこと。日本兵の意地で頑張れたのだ。みんな明日の呼び出しを恐れた。

翌日、英軍が来て武装解除をされた。全く丸腰である。手持ち品の引き渡しも終わった。

飲まず食わず、無駄をはぶいて蓄積したすべてのものが押収され裸同然。これからどうなる。敗残兵のみじめさに心は暗かつた。夜になって一個中隊百五十名の休む室に、たった七名が一個所に集まつて、一本のロソクの灯をたよりに飯盒の飯を食べて、蚊帳を吊る元気もなく、汗の身体を毛布にくるんで休む。ひと

とき故郷の夢、親、兄弟、妻子、次々と。どうしているかな、空襲で焼けてしまわねばよいかと故郷が恋しくなってくる。しかし今が今だ、生きて帰れそうもない、そして明日が気がかりである。

明日の使役はすぐ夜が明ける早々、外谷と上野が使役に出た。十三里（五十二キロ）の道を故障したトラックを押して行ったとのこと。一台に八名ずつで、日本軍の残したトラックの動かないのを一個所に集めたのだが、これも全く食料をいただけず、ヘトヘトになってもどってきた。

その翌日、敵の命令が伝達された。ここを引き払わなければならない。全員捕虜として連行されることになった。私達七名は生死を共にしよう、お互いに助けあってと身を持てるだけのものをもって加わった。持てるだけといっても何キロ行軍するかわからない。毛布一枚、米、水、靴、下着、靴下等身のまわり品。各部隊の残留兵がまとまって千二百名ほどになった。印度兵に看守されながら長い行列が続いた。

街に入ってもこの間までの日の丸は全く見られず、

何処を見ても英国旗のユニオンジャック。現地人の同情した顔も見られず、ののしりだけであった。少しでも日本兵に近づきのあった人はすっかり影をひそめて出てきません。重い荷物を背負ったまま五十キロの道を歩いた。昼食ぬきは覚悟していたが、今朝も食事をしていないので疲れた。

ケッペルの元兵器倉庫に着いたのは夜もかなりふけていた。ここがこれからの宿舎になるのだ。捕虜生活の苦勞がここから始まった。夕食も無く、デコボコ荒塗りのコンクリート上に腰を下ろしたまま一夜を明かした。南方の夜は短い。やっとなむりについた頃起床の声がひびく。身の廻りの整理をする間もなく整列。軍隊の命令は厳しい。これよりすぐ作業にかかる。また朝食抜きである。たまたまなかった。しかし日本人である、武士である、我慢するのだ。最後を飾れと頑張った。

その日は夢中で働いた。何人かが倒れて運ばれてゆく。全く夢も希望もなくせめては祖国の恥にならぬようにと努力した。朝の食事はおもゆ（粥）だった。干

しトウモロコシを水たきして缶詰の空き缶に割当をい
ただく。昼食は馬糧にしたフスマを練って煎餅型にし
てふかしたのを二枚だけ。夕飯はトウモロコシのおも
ゆ、そして作業にはみっちり使われ、重労働。百キ
ロ位の重い荷物を休憩も与えられずかつぎ、積み込み
輸送クリーに使われた。

一番性質の悪いのが英軍の赤帽部隊。何をいっても
ぐちにすぎない。印度兵に今は看守になってほしいと
心で神だのみする。赤帽は人間と思えぬ残酷さである。
誰も赤帽をきらった。ケル、ナグル、ツキタオス、動
物として扱われた。日本兵はドレイです。疲労と空腹
の明け暮れです。長い一日が暮れて疲れきった身体で
キャンプに戻ると、宿舎にあかり（光明）がないので
手さぐりで自分の席に入る。与えられた自分の席は身
体が横になれるだけ。作業の帰り道の途中で捨ててあ
る麻袋を拾ってきただたみの変わりにコンクリートの
上へ敷き、これが寝床であり、憩いの場所です。一枚
の毛布を敷いて戦友の毛布をかけて互いにだき合っ
て寝た。だが空腹で寝つけなかった。

みんなひげボーボー、やせてしまった。作業場でハ
カリにのって見たら私の体重は三十八キロになってし
まった。夜になると悪い英兵がまわってきて日本兵の
時計を奪ってゆく。強盗です。抵抗できないので三名
位で次々に調べて、金目のものはまきあげる。特に時
計が狙われる。日本兵は誰でも時計は持っているのに
英兵には無い。毎晩のようにくるので日本兵の時計も
なくなってしまう。それでも腕を調べて南方の陽に
やけた手首に時計バンドのあとが残っているとかくし
てあるとせめる。何をされても我慢するようにいわれ
ているので守らねばならない。一にも二にも我慢だ。
くやし涙で目が曇る。

横になっても空腹で、上になった方の横腹がつかれ
て痛い。寝返りすると逆につかれる。まるきり空腹で
す。誰かがバリケードのへりにある南方桑の葉をつん
で食べた。それをみて皆食べた。いつか南方桑の葉は
つみとられ坊主になってしまった。まるで蚕と同じだ。
街路をアイスクリーム売りがカネをならしながら通
る。欲しいけれどお金がない。つばをのんでこらえて

いる。バリケードから手をのばして夢中で無銭食してしまつて問題になつた兵もある。たまたま夜半に俄雨が降ってくる。スコールだ。飛び出してしばらく振り入浴のかわりです。セメント工場の仕事で三日もつづけると汗でセメントがかたまつて少しの雨ではなかなかとれない。カニイ等通り越してしまつてゐる。水道はとめられて水をつかわせてくれない。作業が終つて少しゆっくりすると明日の作業が話題である。

赤鬼に使われたくない。希望だ、神だのみです。

作業は主として戦争中焼けたあと始末や道路つくり、武器弾薬の始末、運搬、ドブ掃除等であつた。南方開発銀行に積んであつた日本軍紙幣二十八億円の始末等、十銭、五十銭、一円、五円、十円の紙幣をつめた箱の目方は八十キロ、これをついで五階から運ぶ。階段を下りてトラックに積み込む。箱の角が肩にめり込みそうです。痛い、重い、足もとに注意しないと踏みはずす。遅いとムチで打たれる。蹴る。南方の暑さはまた厳しい。汗が目にしみる。腹がへつていたので水ばかり飲んでゐる。水のない場所は自分でわからない。

休み時間は昼休み三十分、屋根のない南の太陽直下で尻の焦げるようなコンクリートに腰を下ろしたままで休む。何でもいい口に入るものが落ちていないかとそののみ。英兵がタバコの吸いガラを捨てるとそれを拾つて戦友と交替に吸う。印度兵が食べ残したカレーライスを捨てるのを待つて鶏が餌をあさるようにつけて一つかみずつでも口へはおぼる。道路に缶詰が自動車のタイヤでつぶされて中味がハミ出している。こんなのは一番のごちそうだつた。

作業中に倒れた者は道路ふちに横になつたまま寝てゐる。私も途中で倒れたふりして作業の終わりを待つて身を守つたことも何回かありました。

毎日毎日昼食はフスマのふかしを二枚、かた餅やさつまいもなど懐かしい食べ物話題です。一度でいいから腹一杯食べてみたい。十月二日ドブ掃除をしていた時重油が流れてきた。これをすくつて空き缶に入れてポロキレを入れて火をつけたら灯火が出来た。みんなも油をすくつて灯した。やつと手さぐりからあかりのある宿舎になつた。

この頃から米倉庫の作業が多かった。百キロ入り麻袋の米をかついで積み換える。高くなってくると百キロ袋を担いで板橋を渡り登ってゆく。米の麻袋を踏んでゆく中に麻袋が破れて米がはみ出す。天の助けと見つけるとこぼれた生米を口いっぱいはおぼり、噛まずにそのままひと呑みして腹いっぱいにする。ゴミもホコリも見わけする間がない。そして看守のすきを見て靴の中に入れる。宿舎に持ちかえるのだ。足がこすれて痛い。

米が欲しい。明日の作業は何に代わるかわからないから。英兵は気付いたか帰りがけにはきまって三十分位かけ足をやらされる。ならんで行ったり来たり二百メートル位の所を繰り返す。素足に靴の米がこすれて痛い。それでも米が欲しい。我慢して戻ってこれを洗って空き缶に入れて、英兵看守の目をぬすんで重油の灯火の上のせて飯をつくる。七人がかこんで分け合う。何ともいえないうまさ。

シンガポールの夜は美しい。星が明るい。月が近い。幾分腹がらくになると庭の小高い丘の草に寝そべって

故郷を語り合う。故郷を離れて三年半、日本のことは何もわからない。敗残国日本はどうなっているのだろうか。生きて帰れる望みもない。戦争中と違ってシンガポールの街には美しい灯がついた。この世に地獄・極楽があるのだ。支那の男女が手をつないで通る。若い男ばかりの敗残兵だが気になるのは食べ物だけです。遠くで雷光が光っている。雨がここへ降ってくれば水が出来る。身体が洗える。水が欲しい。キャンプだけ水が止められている。作業先でたっぷり飲んでも汗になってしまっただけ、そう長くはもたない。シンガポールには春も秋もない。常夏である。カレンダーもない。今日は何月何日なのかわからない。ただその日だけがあるのみ。

この頃、朝になって毎朝のように首実験がある。戦時中現地人をいじめたという戦友が、毎日何人が罰に問われて連行されてゆく淋しい気持ちです。長谷川曹長が逃亡しようとして捕らえられ罰せられた。同胞の責められるのはつらい。外人にいじめられる邦人を助けられない。自分の身内の者がいじめられている同じ

思いです。いじめはみんなに見せしめのため、五十キロの鉛の伸板を頭上にさし上げ、何十回でも続ける。つかれて倒れる。すると頭から水をかける。気がついて起き上がる。さらに続けさせる。日本軍人です。いかにいじめられても音をあげない。いじめは夜まで続く。庭の中央に一メートル四方に柱を四本たて、ぐるりとバリケードで幾重にもからくり、絶対逃亡出来ないようにしてほうり込まれ、ロクな食事も与えず一週間この見せしめは続いた。

ドロボーのない国英国、博愛ナイチンゲールを生んだ英国にも悪い奴は多い。戦後の市内にタバコの少ないのいいことに軍需品を盗んで街へ売りとばす。この悪い仕事を行い遊興費をつくっていた。またこのあぶない仕事を言葉の通じない日本兵にやらせていた。憲兵にとがめられれば見えかくれについできた英兵の姿はなくなってしまう、言葉の通じぬ日本兵だけが荷物をついだまま捕らえられ、罰にとわれ連行された。このうわさはひろがって盗品とおぼしきものは断つてもよいということになりました。

誰にたのまれたと聞かれても外人みな同じに見えて、よほど特徴がなければわからない。この頃から作業は波止場の荷揚げが多かった。船に乗ってグレンを扱う兵、船倉でモッコへ荷を積む兵、モッコを受けて荷を下す仕事、降ろした荷を倉庫へ運んで積む兵。荷物が倉庫に積まれると員数の責任は倉庫側にあり倉庫へ入る前は船の責任です。看守の英兵は急がせて荷造りをこわすように仕向けている。乱梱は水際に抜き取る。日本兵が丁寧に運ぶとおこる。われわれに考えられない行為です。支那人やマレー人の苦力が時々ストをやる。その度に日本兵は二十四時間労働をしいられる。

船倉の仕事では佯詰の不良等をかかれて少しずつ食べられるようになった。でも見つければ罰をうける。見つからぬよう食べるのだ。だんだん上手になる。責任者の松本中尉は渴しても盗泉は飲まずといって兵をとめる。しかし兵は労働するので管理者と同じではない。日本兵はクリーの三倍は働いた。現地労働者は日本兵に頑張つて働かれると折角のストが駄目になる。余り働かないでくれとたのまれる。しかし我等の

この働きが戦争弁償の一部になるのだといわれ、すべてが祖国への奉公であると信じて作業はまじめに続けられた。

過労のため病兵もかなり出たが全員の一割以上は認められない。熱があっても三十八度以上でないと入院出来ない。病気は英軍の軍医がきて診断する。一夜入院したら容易に病室を出ない。そのため後が入れない。我慢している。病をおして作業に出る。ずるい患者は病室にいれば作業がないため、診断の時間の寸前に熱い湯を入れた水筒をわきの下におき、体温計の温度を上げて入室を続けている兵もある。病人に食事を運ぶのに一口だけ先にすすって知らぬ顔で親切をうっている人などいろいろです。

この頃、捕虜收容所はチャンギー、リババレー、ケッペルと三か所にあり、有馬大佐が総隊長に代わられた。今までは私達のケッペル隊長は鈴木少佐から花岡少佐に代わり、今は有馬大佐の傘下に入った。有馬大佐は親英の人で收容所長メーテン中佐とも親交があり、こちらの要求も少しづつきいてくれるようになった。

た。看守兵も英兵から印度兵に代わり今までより幾分らしくなった。

印度兵には親日派が多かった。ガンジー、ネール、チャンドラボース等独立運動を行った影には日本の犠牲があつたことを忘れてはいけなないと、ネールはシンガポールで在留インド人をあつめて演説を行った。

「情けは人の為ならず。日本人をいたわれ」の発言は大変有難かった。何の楽しみもない收容所に演劇が許可になったのもこの頃でした。スポーツも許された。スポーツは相撲です。また收容所の空地での野菜は人糞で自分の糞を他の中隊へはやらす自分の畑の肥料にする。やつと野菜が食べられるようになった。

日本軍から押収した味噌も少しづつわけてくれた。米も少しづつ頂けるようになった。おもゆのコーンの中に米がまじった。クリスマスの日には皆に希望するものを一つだけ書いて出すよう命令があつた。みんな紙キレに書いて出した。飯がほしいと言わず語らずみんなの書いたものが一致しました。この日夕飯はなつかしいおほぎが出た。好きなだけ、食べられるだけ食

べろといわれた。驚いたことに砂糖のきいた小豆が美味しかった。

演劇団の出現によって急に收容所は明るくなった。戦時中日本軍の捕虜となって働かされた英兵のほとんどが帰ったためもある。

收容所の庭に古材を集めて舞台小屋をつくり、トタンや細い針金を集めて色々な楽器をつくった。大勢の中には芸人もたくさんいた、監督もいた、看板屋も楽器屋もいて作業の帰り道等に落ちているものを活かしてつくった楽器等は立派だった。大道具、小道具、役者も揃った。役者になる者は作業に出ず演劇の研究。

そして興業は夜のみで作業が終わってから見られる。交替に夜間作業があるので週の中、半分は見られなかった。演芸で大変喜ばれたのは「番場の忠太郎劇」(臉の母)であった。

英兵も印度兵も無学者が非常に多い。トラックの運転は出来ても方向指示器の見方が不確実で危険である。荷物の積みおろしにも、数は日本兵を頼っている人が多い。梱包は品名を書かず赤○青○黒○といったよう

に色別になっている。さすがイギリスは簡単にしてある。赤を何個といえは積んだ数も残数もわかる。荷物は五列に揃え五個高さも五段にして数をかぞえている。適当に積んでは必ず数がわからなくなる。日本兵の休時間だ。

長野県出身の上野甫一等兵は床屋さんでバリカンとカミソリ等をかくし持っており班長の私と久保田軍曹はよく刺してもらった。外谷一等兵はよく水を集めてもってきてくれた。

この頃チャンギーキャンプより次の歌がはやってきました。

今日も一日玉の汗 黒き腕よ髭面上
只一筋の兵士の ゆめはいづこに通うらん
遙か祖国の同胞よ 田畑裏火囲む父母は
今頃いかにおわすらん

ひしひしと故郷が懐かしくなってくる。

百々瀬兵長は家が長野県上高地に旅館業で、楽しい思い出も多く、女学生の修学旅行一行が浴場にてはしゃぐ姿などを話し、若い兵士に喜びをもたらしてく

れた。

第三中隊の兵が作業先でウドン粉をみつけ、こっそりとお湯でねって食べ、下痢を起こしてしまった。なおるのも早かった。ウドン粉と間違えたのは実は壁材の粉だった。昭南神社もブキテマの忠霊塔も取り除かれ今は何一つ日本色はなくなってしまった。

昭和十七年二月シンガポール昭南島入城の軍歌、

一番のりをやるんだと　りきんで死んだ戦友の

遺骨をいだいて今入る　シンガポールの街の朝

友よあれ見よあの泣いた　マラッカ海の十字星

夜を日についた進撃も　君とながめたあの星を

山からおこる万歳に　思わずほほがぬれてくる

シンガポールはおとしても　まだ進撃はこれから

だ

遺骨をいだいて俺はゆく　まもってくれよ戦友よ

勝てば官軍の言葉通り負けた日本のは何一つない。

懐かしい元の兵営へ行っても今は捕虜となつて働

いているみじめさ。ぐちもこぼさずただ黙々と働き続

ける兵士たち、これが日本男子だ。

しばらくして日本のニュースが聞けるようになってきました。焼野原となり食もなく同胞が復興に努力している。肩がはって歯がいたい、薬とてないのでヨーチンを歯肉にぬって我慢する。何回かやっている中に次々に歯がかけてゆく。ここ十か月口もゆすがずこれが普通となれば何でもない。身体を洗うのもスコールの降ってきた時だけ。溜池もみんなの油汗でどろどろに濁ってしまった。看守の豪州兵も性質は非常に悪く、人間らしいのは印度兵だけです。

この頃インドネシアの独立運動が活発になった。日本に学んだインドネシア軍はよく戦ってオランダ軍を破って勢力を伸ばしてきた。日本軍はこの暴徒の鎮圧のため武装解除後再び武器を与えられ、この鎮圧に協力した。現地兵は真の日本兵の強さを知っているのに戦わずして従った。そしてインドネシア軍指導のためとして日本将兵の参加募集が行われ、日本軍の中からも参加のため脱出する兵も少なくなかった。日本兵はいずれも幹部として迎えられた。

この頃から病弱者は内地へ帰還が出来るようになって

た。また兵隊以外の邦人達や我々も帰れる日があるらしいとの話が出てきた。波止場の作業をしていると日の丸をたてた三千トン級の貨物船が入ってきて日本の話が聞ける。日本は全く焼野原で貧しい食料で頑張っており、帰還兵も人間のふえることとなり喜ばれないなどと聞かされました。うわさと想像で夜の話に花が咲く。急に故郷が恋しくなる。生きて帰りたい。

お正月に全員一階級ずつ進級したのですが今は階級・進級等どうでもよい。無事に日本の土が踏めるようにと毎日が心の中の神だのみです。

六月、やっと「帰還、乗船」の命が下り三千トンの貨物船に乗船した。